

菊池寛作

三人兄弟

朗読

武田たか子

赤沢伸子

川谷内栄子

第二卷 4. 菊池寛「三人兄弟」



菊池寛（きくち かん）

1888年（明治21） - 1948年（昭和23）。香川県生まれ。家は貧しかったが向学心が強く、苦勞して第一高等学校に入学。だが、卒業を目前にして友人の罪を着て退学、京都大学英文科に進む。一高時代の友人、芥川龍之介、久米正雄らと第3次、4次「新思潮」を創刊し、戯曲「屋上の狂人」「父帰る」、小説「身投げ救助業」などを発表。さらに「忠直卿行状記」「藤十郎の恋」「恩讐の彼方に」などの名作を世に出し、文壇的地位を確立。昭和期に入ると文芸春秋の創刊をはじめ文芸家協会の設立、芥川賞、直木賞の設定など「文化事業」に重きをなし、文壇の大御所と言われるようになった。

「三人兄弟」は鈴木三重吉に勧められて書いたもので、1919年（大正8）4月から6月まで「赤い鳥」に連載された。原題は「一郎次、次郎次、三郎次」で、内容は次のとおり。

「都から遠く離れたある村に、三人の兄弟が住んでいたが、先行きを考え一緒に都に向かう。途中、道が三筋に分かれていて、三人は別々の道を進んだが、十年後、その行く末は大きな違いとなり、再会する」。私たちはよかれと思つた任意の道を選ばざるを得ないが、それは個人お努力とは全く別な運に大きく左右されてしまう。菊池寛はこの作品で、「明治期以来尊ばれてきた刻苦勉強だけでは処しきれないことを暗示している」ようでもある。

本朗読に当たっては、兄弟三人のキャラクターをより鮮明に表現するため、三人による「群読」とした。

まだ天子様の都が、京都にあつた頃ころで、今から千年も昔のお話です。

都から二十里ばかり北に離れた丹波たんばの国のある村に、三人の兄弟がありました。一番上

の兄を一郎次いちろうじと言い、真中まんなかを二郎次じろうじと言い、末の弟を三郎次さぶろうじと言いました。不幸

なことに、この兄弟は少ちいさい時に、両親に別れたため、少しばかりあつた田や畑はたも、い

つの間まにか他人に取られてしまい、今では誰だれもかまってくれるものもなく、他人の仕事

などを手伝つて、漸ようやくその日その日を暮しておりました。が、貧乏ではありましたが、

三人とも大の仲よしでありました。ある夜よのことでありました。一郎次は、何かヒドク考

え込んでいましたが、ふと顔を上げて、

「こんなにして、毎日末すえの見込みこみもなしに、ブラブラ暮しているよりも、いつそのこと

都へ行って見ようかしら。都には、面白いことや賑にぎやかなことが沢山あるそうだが。」と、

言いました。

それを聞くと、二郎次も三郎次も声を揃えて、

「それがいい、それがいい。都へ行けば、きつといいことがあるに違いない。」と、申しました。一郎次は、「それなら善は急げというから、明日にも出立しよう。」と、言いました。

あくる日は、秋の空が気持よく晴れ渡って、太陽までが三人の出立を祝うているようでありました。三人は元気よく村を出まして、南へ南へと都の方を指して急ぎました。

途中で、一晚泊り、二日目の朝、大きな峠を登りますと、その峠の頂上から遙か彼方に、朝靄の中に、数限りもない人家が地面一ばいに並んでいるのが、微かに見えました。

「ああ、都だ。」と、三郎次が、大喜びの声を出しました。それから兄弟三人は、前よりも一層足を早めて、峠を駆け下りました。すると大きい公孫樹が、道傍に一本立っていました。と今まで一筋道であった道が、その公孫樹の木の所から、三筋に別れているのに

気が付きました。兄弟はちよつと困りました。

「どの道が一番近いのだろう。」

「真中の道が一番近そうだ。」

「いや、左の道が一番近そうだ。」

すると、一郎次は、何やら考えた後で、

「わたし私は、一番右の道が近いように思うのだ。が、どの道を行つても、都へ行き着ける

のは確かだ。兄弟と一緒に揃つていては、奉公口を見つけるにも都合が悪くはなからうか。

それよりも、皆別れ別れに、自分の近いと思う道を歩いて、銘々の運をため試して見ようか。」

と、言いました。

「それは、よい思おも付いつだ。」と、二郎次も三郎次もすぐ賛成しました。

それで、一郎次は、右の道を、二郎次は真中の道を、三郎次は左の道を進むことになり

ました。別れる時に、二郎次は兄と弟を振り返りながら、

「たとい、ここで別れても、兄弟が、めいめい都で出世すれば、必ずどこかで逢えるに違ちがない。」と、元気よく言いました。

先まず、初めに右の道を進んだ一郎次のお話をいたしましょう。

一郎次は、第二人と別れて、足を早めて、歩きましたが、その道は大層景色のよい道で、両側には美しい秋草が咲き乱れていました。二里も歩きました時、黄色い稲田の向うに、青空に聳そびえている五重の塔が見えました。

「ああもう都もすぐだぞ。」と、一郎次は小躍りこおどして喜びました。

ところが、丁度そのとたんでした。道の行手ゆくてに、砂けむりが立ったかと思うと、その砂けむりの中から、一頭の白い牝牛おしが太い鉄つのような角を左右に振り立てながら、飛ぶよ

うに走って来ました。きつと、この牛は何かに驚いて、気が狂ったのでしよう。両の目は、炎のように真赤で、眼の前にあるものは何でもその角で突きかけようとするような勢いきおいです。

一郎次は、その怖おそろしい勢を見て、体を道傍みちばたへ除けようとなりましたが、牡牛はかえつて一郎次の方へ真直まっすぐに突き進んで来て、アツト思う間もなく、一郎次を二つの角で引っかけたかと思うと、一間あまりも投げ飛ばしたまま、また砂けむりを蹴けたて立てて走って行きました。

投げ飛ばされた一郎次は、右の腋わきの下に刀で刳えぐるような痛みを感じました。彼は、もう死ぬような気がしました。

「ああ、俺おれは一番損な道を来たものだ。右の道を来たために、都の入口で死ななければならぬか。」と、心の中なかで思いました。が、その中に傷の痛みが強くなって、いつの間

にか気が遠くなつてしまいました。

何時間経たつたのか、何日経たつたのか、一郎次には分りませんでした。ふと、目を覚さますと、自分は、立派な御殿の中に寝ていました。自分の体の上には生れて一度も見たことのないほどの美しい絹の蒲団ふとんが掛けてありました。枕まくらもと元には、銀の碗わんにお薬が入つておりました。その上に、ふと気が付くと、美しい女の人が、部屋の中に一人坐つていました。一郎次が、目を覚さめたのを見て、その女の人は、

「やつと、お気が付きましたか、ここは、左大臣藤原道世様のお邸やしきでございます。

実は、昨さくじつ日道世様が、鞍馬くらまのお寺へ御参詣ごさんけいの途中、お車を引く牛が、暴あばれ出して、

あなたにそんな大傷おおきずを負わせたのでした。道世様は、それを大層気の毒おぼしめに思召されて、

お寺へ参る途中で人を殺しては、仏様に済まない、出来るだけ手厚い介抱をして、あの若者なほを癒なおしてやれと仰おほせになりましたので、あなたを御殿へ連れて来て、都で第一番のお

医者を呼んで介抱しているのです。」と、言いました。

一郎次は、夢ではないかと驚きました。

左大臣藤原道世と言え、天子様の第一番の家来で、たんばのくに丹波国の田舎いなかまでも聞えてい
る、名高い人でありました。

その女の人は、しばらくすると、こう言いました。

「道世様が、こう仰おつしやいました。この若者は、遠い田舎から都へ出て来て、親類も
ない者に違いない。傷が癒れば、家来にして使うてやろうと。」

それを聞くと、一郎次は、傷の痛みも忘れるほど喜びました。左大臣道世様の家来にな
ることは、田舎の百姓の子である一郎次にとって、この上もない出世でありました。

一郎次の傷は、ほどなく癒りました。そして、約束の通り、左大臣の家来になりました。

正直で、利口な一郎次の事ですから、グングン出世しまして、十年経つか経たないうち

に、けびいし 検非違使という役になりました。そして名も左衛門尉清経さえものじようきよつねと改めました。

検非違使というのは、丁度警察署長と裁判所長とを兼ねたような、大層いきおい 勢いきおい の強いえらい役で、盗賊や悪者を捕らえて裁判するのが仕事でありました。

真中の道を進んだ二郎次は、兄と弟とに別れてからは、駆け出さんばかりに、足を早めて急ぎました。が、真中の道が一番近いと思つたのは、とんだおもいちがい 思おも 違ちが いであつたと見え、二里歩いてても三里歩いてても道の両側には竹藪たけやぶばかりが続いていて、淋しい田舎道がどこまで来ても絶えません。三人兄弟の中では、一番気の強い二郎次も、とんと当惑してしまいました。

「この様子では今宵こよいのうちには、とても都に着けそうにはない。どこかで一晚とま宿ることにしよう。」と思ひました。そのうちに道傍みちばたに地蔵様のお堂がありましたからそこで

一夜を明すことにしました。ところが真夜中頃でした。寐入ねいっている二郎次の肩を揺すぶって、

「おいおい。」と、揺り起す人がありました。

それは武士らしいいかにも強そうな男でした。その男は、「おい、お前は一体どこの者だ。

なぜこんな所で寐ているのか。」と聞きました。二郎次は、おずおずしながら、丹波の国から都へ行く訳を話しました。すると、その武士は、

「それはよい都合じゃ。わしの仕えている殿様は、お前のような若者なら幾人でもお召し抱えになるのじゃ。奉公する気はないか。」と言いました。それを聞くと、二郎次は小躍りして喜びまして、早速奉公したいと申しました。

やがて、二郎次は武士に連れられて、その殿様の館やかたへ行くことになりましたが、都の方へは行かずに、道から左に折れて、小川に添うた細い道を進んで行くのでした。二郎次

は、ちよつと不思議に思つて、「そのお殿様すまというのは、都にお住いではないのですか。」と聞きました。すると、武士は、「都にも館はあるが、今は、みぞろゝゝゝが池の傍そばに住んでいられるのじゃ」と言いました。

そして二、三丁も来た頃です、急に今までの森がなくなつたかと思つと、池に添うて広い平地があつて、その平地の真中に、それはそれは立派な御殿がありました。二郎次には生れて初めて見るほどの美しい大きな御殿でありました。

大広間の中には、どれもこれも強そうな男が三十人ばかりお酒宴さかもりをしていました。

そして一番高い所に、身の丈たけが六尺もある位な大男が、胡座あぐらをかいて坐つておりました。

それはそれは強そうな、獅子ししでも虎とらでも一掴ひとつかみにしそうな男でした。

二郎次を連れて来た武士は、「この若者が奉公をしたいと申しますから、引き連れてまい

りました。」と申しますと、その大男は、「よしよし。」と破鐘われがねのような声を出して肯うなずき
ました。それから、二郎次も皆みんなと一緒に酒を飲んだり、物を食べたりしました。そ
れは生れて初めて食べるような御馳走ごちそうを、腹いっぱい食べました。二郎次は心のうちで、

「その日のうちに奉公口きが定まって、その上にこんな御馳走が食べられるとは、こんな
うまい話はない。己おれが進んで来た真中の道は一番幸さいわいな道だったな。」と思いました。

その翌晩でした。昨日二郎次を案内して来た武士が、

「今晚は、お殿様が都へおいでになる。お前もお伴ともをさせてやる。」と言いました。

二郎次は、こんなに夜遅おそくお殿様はどこへ行くのだろうかと疑いながらも、黙って付
いて行きました。やがて、大きな川にかかっている橋を渡ると、そこはもう都の中だと見
え、立派な家が沢山並んでいました。その中うちに、皆みんなは中でも一番立派な家の前に止り
ました。そして何か相談を始めました。

二郎次はお殿様の都のお館うちというのは、この家のことかしらんと思っていますと、五、六人の男がバラバラと仲間の列から離れたかと思うと、この立派な家の塀へいをスルスルと登りました。オヤオヤと驚いていますと、塀を登って這入った男が内から門をギイツと明あけますと、仲間の者は皆、長刀や太刀を抜き放して、ドヤドヤと門の中へ押し入りました。

二郎次は余りの怖ろおそしさにブルブル顛ふるえていますと武士が傍そばに来て、

「何と驚いただろう。己おれがお殿様と言ったのは、この頃でも名の高い鬼童丸きどうまるという

おどろぼう

大盗坊じゃ。お前はたん奉公すると言ったからには、逃げる訳には行かないぞ。」と言いました。

そのうちに、家うちの中では人の叫ぶ声や、斬きり合いをする音がしたかと思えますと、

盗坊どもはめいめい金銀の這入はいった袋を重かさそうに担かついで出てまいりました。

やがて、みぞろが池の御殿へ帰って来ますと、鬼童丸は手下を大広間へ集めて、盗んで

来た金銀を山のように積んで、それを一掴みひとつかずつ手下にやりました。二郎次が片隅かたすみにブルブルと顫えていますと、鬼童丸は破鐘われがねのような声で、

「おい、小僧、遠慮をせいでもよいぞ。お前にもやるぞ。」と言いました。貰もらわなければ掴み殺されそうなので、二郎次はビクビクしながら、受け取りました。根が三人兄弟のうち中では慾の一番深い二郎次でしたから、そんな大金を見ると、フラフラと悪い心が起りました。お金がこんなに儲もうかるのなら、盗坊どろぼうの仲間になってもいいと思いました。そしてとうとう心から鬼童丸の手下になりました。元来利口で勇氣のある男でしたから、盗坊の仲間では、だんだん出世をしまして、鬼童丸が源頼光みなもとのかうこう様に殺された後のちには、自分が仲間の大将になって、名を改めて、みぞろが池の多能丸たのうまると言って、都近くの家を荒しておりました。

左の道を進んだ三郎次は、兄弟の中では一番年も若く、気も優しかったので、二人の兄と別れて、淋しくて泣き出しそうになりました。が、これではならぬと思い返して、元氣よく進んで行きようや漸く都の町はずれに着いた時には、もう一ひとあし足も歩けないほどに疲れていました。どこかに宿屋はないかと、キョロキョロ見廻していますと、

「もしもし」と呼びとめる女の人があり、

「あなたは旅のお人でございますか。」と聞きました。

「はい、私は丹波の国から都へまいるものです。」と言いました。すると、女の方は喜んで、「それでは、私の主人の家いえまでちよつとお出で下さい。決して悪いことはありません。」と申しました。

三郎次は喜びまして、誰一人知しるべ辺のない都の中で、こんな親切な人に逢あうのは、地獄で仏に逢うようなものだと思います。

女の人は三郎次を連れて立派な家の中に這入りはいました。そして長い廊下を通ったかと思
いますと奥の一間へ案内しました。見ると、その部屋は、目も眩くらむような美しい部屋で、
床とこの間には金や銀の道具が沢山置いてありました。三郎次があまりの美しさにぼんやり
立っておりますと、女の人は、

「あすここに寝ていられるのが御主人様でございます。」と言いました。

いかにもその美しい部屋の真中に、一人の年寄としよりの病人が、苦しい息をしながら、床の
上に寝ていました。すると病人は女の人に、「それでは、娘を呼んで来い。」と言いました。

三郎次がおずおずと年寄そばの側に坐つて待つておりますと、そこへ間もなく十五、六
の美しい女の子が這入つて来ました。年寄は三郎次に向つて、

「私わしはあなたにお願ねがいがあるのじゃ。なんと聞いてはくれまいか。」と、手を合あわさん
ばかりに言いました。

三郎次は、苦しそうな病人の様子を見ると、気の毒になりましたので、

「私の出来ることなら、何でも聞いてあげます。」と言いました。すると、病人はホッと安心したように、「この娘をお前さんのお嫁にして、この家を継いでくれまいか。」と言いました。

これを聞いた時の三郎次の驚きと喜びとは、どんなであつたでしょう。が、よく考える
と、自分のような乞食同様な百姓を、こんな長者ちようじゃの内の婿むこにするはずはない、これはきつとこの年寄の気が狂っているのか、それでなければ笑談じようだんに言っているのだと思
いましたから、正直な三郎次は少しムツとして、

「子供だと思つて私をなぶるのはよして下さい。私は百姓のせがれで、こんな長者の内の婿になるような者ではありません。」と言いました。すると、その病人は、

「訳を話さなかつたのは私わしが悪かつた。合点がてんの行かぬのも尤もつともじゃ。」と、病人は苦

しそうにコンコン咳せきをしながら話しつづけました。

「私は一代のうちに、十萬貫という身代を作ったもので、都でも加茂かもの長老と言え、誰知らぬ者ありません。が、私はお金を蓄ためるのに、いろいろ悪いことをしました。貧乏人にお金を貸して、高い高い利子を取ったり、百姓から重い年貢を取ったり、時々は贋にせの証文を書いて、他人の家や、田畑を騙だまして取ったりしたこともあります。その上、どんなに困っているものがあっても、米一合、お金一文も恵んだこともありません。そのお蔭かげで、お金は面白いようにどんどん溜たまりました。その代り世間の人からは、全く、鬼じゃか蛇のように憎まれて来ました。私はついこの頃まで、お金さえあれば、どんなに憎まれてもかまうものかと思っていました。

ところが、今年の春、私の妻が死に、私も重い病氣になりました。私には、子供と言つてはこの娘がたった一人なのです。私が死んだら、娘が一人ぼっちになって、さぞ困るだ

ろうと思いましたが、私の生きているうちに、是非よい婿を取ってやろうと思って、都の内を探しさがにかかりました。すると、どうでしょう。どの家でも加茂の長老の家へは婿にはやれない。鬼の家へ婿にはやれないと、誰一人婿に来ようという人はいないのです。

私は、とうとうこう考えました。都の人はみんな加茂の長老を憎んでいるから、とても婿きてに相手はあるまいが、旅の人なら私を憎む訳はないのだから、来てくれるかも知れないと、そこで、召使いの者を街道へ出して、旅の方に来ていただくことにしたのです。運よく、あなたのような立派な方に来ていただくことが出来て、こんな嬉うれしいことはありません。せん。親子二人を助けると思つて、どうか私のお願いを聞いて下さいませんか。」と言うかと思つと、病人はさもさも疲れたように、グツタリと俯伏うつぶしてしまいました。

三郎次は、どんなにお金かあつても、都中の人から鬼のように憎まれておる家の婿になつては、どんなひどい目に逢うかも知れぬと思つたので、一度は断ことわろうと思つた

た。　　が、根が気の優しい三郎次は、

「そんなに、お頼みなら、いかにもこの家の婿になりました。すると、病人は手を合わして、三郎次の方を拝むように見えました。それで安心して気が緩ゆるんだと見え、そのまま息が絶えました。」

三郎次は悲しみに暮れている娘を慰めて、お葬とむらいを出した後で、その娘をお嫁にしまして、二代目の加茂の長老になりました。そして、身代の十万貫の半分の五万貫を、都中の貧乏人に分けてやりました。すると、世間は正直なもので、都の人々は寄さわると触ると、

「前の加茂の長者は鬼であったが、今度の長者は仏様じゃ。仏の長老じゃ。」
と、噂うわさしました。こうして、三郎次は夫婦仲よく、貧乏人を恵んで、幸福に暮し花子と
いう可愛かわい女の子も生まれました。

三人の兄弟が、都へ出る途中で、三筋の道に別れてから、十年も経ちました頃のことです。検非違使というエライ役を勤めている一郎次の左衛門尉清経の下へ、もと都で名高い加茂の長者から うったえ訴 がありました。

それは、その前の晩、加茂の長老の家へ盗賊の一隊が押し入ってお金を沢山盗んで行ったばかりでなく、娘の花子を攫さらって行ったというのです。左衛門尉清経は、前から盗賊のあばれ廻ることを怒っておりましたが、もう一刻も、そのままには、捨てて置けないと思いました。それで、家来の者を集めまして、

「うわさ噂 にきくと、ゝゝゝみぞろが池には、きじよ鬼女が住むという噂があつて、人の近よらないのをよいことにして、多能丸という大盗棒おおどろぼうが立派な邸を作つて住んでおるといふことじや。加茂の長老の家に押入つた盗賊も、この多能丸に違いない、早速、いけど生捕りにして来い。」と、申し付けました。

その翌日、みぞろが池に行った家来の一人が走って帰りました。

「殿様、およろこび下さいまし。多能丸を見事に生捕いけどりました。長老の娘の花子も、無事に取り返しました。」と申しました。

左衛門尉は大喜びで、

「直ぐ加茂の長者の家へ行つて、花子を受け取りに来いと言え。」と、申しました。

やがて、検非違使のお役所へ多能丸が、連れられて来ました。そして、庭の白い砂の上に、坐らされました。丁度、そこへ加茂の長者が娘を受取りに自分で

やって来ました。これは縁側の上に坐っております。

間もなく、烏帽子えぼしをつけて立派な服を着た左衛門尉が、しずしずと現れました。左衛門

尉は、一番高い上座に坐ると、加茂の長老の方を見て、「お前が、加茂の長老か。」と、言いました。今まで俯うつむいていた長老は、顔を上げて、

「はいさようでございます。」と、言いました。その顔を一郎次の左衛門尉がよく見ますと、それは紛れもない弟の三郎次ではありませんか。一郎次の左衛門尉は、思わず大きな声を出して、「おう三郎次ではないか。」と、申しますと、三郎次も、検非違使のお役所だということも忘れて、「おう、兄にいさんですか。」と、言いました。二人は、両方から抱き付くようにしてオイオイ泣きました。

が、泣いているのは、二人ふたりばかりではありませんでした。

砂の上に坐っている、盗賊とうぞくの多能丸たのうまるも、やっぱり、縛もられた身を悶もだえながら、齒くを喰くいしばって泣いていました。大粒の涙がポロポロと、砂の上に落ちました。

多能丸の泣いているのに、ふと気が付いた一郎次と三郎次とはこれはまたどうしたわけかと不思議に思つて、この盗賊の顔を見ました。それは、一郎次には弟、三郎次には兄に当る二郎次に違いありませんでした。三人兄弟が、そのときの驚き喜び悲しみは、どんな

でしたらう。 三人兄弟が、三筋の道に別れた時は、たった一^{ひと}足の^{あし}違いでありました。
それがおしまいには、こんなひどい違いになりました。